
甘えんぼな妹へ

遠野 桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘えんぼな妹へ

【Nコード】

N9188R

【作者名】

遠野 桜花

【あらすじ】

私は、ずっと千花と一緒にいるよ……

いつも抱き着いてきてくれた甘えんぼな妹に、今日もまたこの手紙を送ります。

おやすみなさい、千花。

ダメダメな姉、唯花より。

いつも、千花は私のことを慕ってくれた。

「お姉ちゃん」

その可愛らしい声を、今でもはっきり覚えてる。ぎゅっぎゅっ、その小さな柔らかい身体を押し付けてくる暖かい感触が、今でも忘れられない。

きつとこれからも、忘れられない記憶。そして、もう味わうことのできない感触。

今、千花は眠っている。事故に遭ったがための、いわゆる植物状態だ。有り難いことにこの病院は就寝時間を除けはいつでも面接が可能だから、私は毎日この時間に手紙を持っていく。

「いつもご苦労様」

長い病院通いで、この病棟の看護師や医師達とも仲良くなった。検温に来ていた看護師が気さくな調子で言ってくれた。胸のネームプレートが蛍光灯の光を受けてきらめく。

「ありがとうございます、秋山さん」

「本当に、妹思いのお姉さんだね」

その言葉に、私は少し口ごもった。

「……いえ。私は……」

「唯花ちゃんが思ってる以上に、お姉さんはかっこよく見えるものよ。私もお姉ちゃんっ子だったから、よく分かる」

「そんな……っ！」

「唯花ちゃん、これは誰も悪くないの。本当に、誰も。だから、唯花ちゃんのせいでもないの」

「……っ、う、ちい、かあっ……っ！」

それまで胸の中に秘めていた感情が激発した。

目を開けてはくれないけれど、千花はその命の炎を、燃やしている。
話しかけてはくれないけれど、千花は着実に成長している。

とても懸命に。

千花、お姉ちゃんは千花をずっと、見守っているから。

千花がいるから、私も頑張れるから。

だから、お姉ちゃんと頑張ろう。

私と千花の、思い出と一緒に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9188r/>

甘えんぼな妹へ

2011年10月7日20時51分発行